

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 11 月 1 日現在

機関番号：32648

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730593

研究課題名(和文)ジェスチャーを媒介とした言語発達支援

研究課題名(英文)Gesture-Mediated Support for Language Development

研究代表者

加地 雄一(KAJI, Yuichi)

東京家政学院大学・現代生活学部・准教授

研究者番号：80575134

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：養育者(母親)のジェスチャーが子どもの言語発達に及ぼす影響を解明することを目的とした。健康な母子3組(子どもは8ヶ月から18ヶ月児)を対象に、プレイルームでの自由な遊びの様子を録画・分析した。その結果、母親のジェスチャーに子どもがすぐに反応することは少なく、子どもの自発的な発話やジェスチャーが多く見られた。このことから、子どもの言語発達を母親がジェスチャーで促すことは難しく、むしろ、子どもの自発的な発話に対して母親が適切に応答することに効果があることが示唆される。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to investigate how caregivers' (mothers') gesture affect the language development of children. Healthy 3 pairs of mother and child (children were 18 months-olds from 8 months) were participated. They played freely in the playroom and this situation was recorded and analyzed. As a result, it was rare that children react immediately to mothers' gesture, but children's spontaneous speech and gestures were seen more. From this results, it might be difficult to promote the language development of children by mothers' gesture. Instead, it is suggested that if mothers respond appropriately to children's spontaneous speech, the language development will be prompted.

研究分野：臨床心理学

キーワード：ジェスチャー 言語発達

1. 研究開始当初の背景

(1) 申請時における背景：心理発達臨床の現場において多く寄せられる相談内容は言語発達に関することである。2005年に発達障害者支援法が施行され、発達障害に関する関心が高まる中、言語発達支援の要請は必至である。

特に早期支援という視点から見れば、比較的早い時期から養育者や支援者が子どもの言語発達に気がつくことは重要である。近年、子どものジェスチャーの発達が言葉の発達に先行すること明らかになり、子ども(例. 14か月)のジェスチャーの使用状況を調べることで、その後(例. 42か月)の言語発達が予測可能であることが示唆されている(Rowe & Goldin-Meadow, 2009: 引用文献①)。これは、ジェスチャーに注目することで、これまでよりも早い時期に言語発達がアセスメントできることを示唆するものである。例えば、臨床現場で広く用いられている語彙発達検査である「改訂版絵画語い発達検査(PVT-R)」の適用年齢の下限は3歳であるが、ジェスチャーに注目すれば、1歳前後から言語発達査定ができる可能性がある。

また、14ヶ月の子どもと養育者のジェスチャーの使用に相関が見られるという結果も見られることから(Rowe et al., 2008: 引用文献②)、養育者のジェスチャーが子どものジェスチャーの発達を促していると考えられる。そこで本研究では、子どもの語彙発達における養育者のジェスチャーの影響について明らかにする。

しかし、ジェスチャーと語彙発達の研究は海外の研究に限られ、わが国に当てはまるかどうかはわからない。Iverson et al. (2008: 引用文献③)によれば、イタリアとアメリカではイタリアの方が多くジェスチャーを使用する文化であるため、10~24ヶ月の子どものジェスチャーと言語発達の現れ方に違いが見られるという。日本では欧米と比べてジェスチャーの使用頻度は少ないため、ジェスチャーの使用と言語発達の関係について海外と同様の現象がみられるかどうか検討する必要がある。

(2) 申請時における動機：申請者はこれまで、発語前の子どもが指さしによって他者を意識した比較的高度なコミュニケーションをしていることを指摘した(加地, 2010: 引用文献④)。また、対象が成人ではあるが、ジェスチャーの使用が記憶成績を高めること(加地・仲, 2008: 引用文献⑤)、ジェスチャーの記憶向上効果は加齢による認知的衰退を補償するものであること(加地ほか, 2008: 引用文献⑥)、指示対象との意味的つながりがジェスチャーの効果に重要であること(加地・仲, 2010: 引用文献⑦)を実証してきた。

このような研究成果を踏まえ、今度は子どもを対象にジェスチャーの効果を検証した

いと考えるようになった。

2. 研究の目的

子どもと養育者のコミュニケーションにおいてジェスチャーが言語発達にどのような影響を及ぼすのかについて明らかにすることを目的とし、次の2点を検討する。

(1) 養育者のジェスチャーと子どもの語彙発達との直接的な関連性を明らかにする。先に述べたとおり先行研究(Rowe & Goldin-Meadow, 2009: 引用文献①)では、早期の子どものジェスチャーが後の語彙発達を予測すると言われている。本研究では、早期の養育者のジェスチャーが子どもの語彙発達を促すのかについて検討する。

(2) わが国における子どものジェスチャーと語彙発達が、海外の研究(Iverson et al., 2008: 引用文献③)と同様の現れ方をするのかを明らかにする。わが国では特に欧米と比べてボディランゲージやジェスチャーの使用が少ないという文化差がある。したがって、ジェスチャーが語彙発達に及ぼす効果は先行研究と比べて顕著には見られない可能性がある。そこで、海外の先行研究と同様の発達の現れ方がわが国の子どもでも見られるのかを検討する。

3. 研究の方法

研究開始当初は子どもの言語発達について経過を追って縦断的に調査をする予定であったが、研究代表者の所属機関の移動や、研究協力者のリクルートの困難さ等の現実的な制約により、横断的に少数の事例を検討する方法に変更した。

研究対象者(協力者)は健康な母子3組(子どもは8ヶ月から18ヶ月児)であった。調査は1組ごとに個別に実施した。複数の玩具が用意された大学のプレイルームにおいて、母子2名で自由な活動(遊び)を行ってもらい、その様子をビデオ録画し、分析した。研究協力者には規定の謝金が支払われた。

研究方法として研究対象者に関与しない自然観察法を採用した。その理由は、可能な限り普段のありのままの自然な発話やジェスチャーを観察・分析するためである。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果：研究仮説として、「養育者のジェスチャーが子どものジェスチャーや言葉の発達を促す」という予測を立てた。この予測に反し、母子間の自由な遊び場面において、母親の働きかけに子どもがすぐに反応することは比較的少なく、むしろ、子どもの自発的な発話や行動(ジェスチャー)の方が比較的多く見られた(次の、①事例A、②事例B、③事例Cを参照)。

① 事例 A

母子ともに指差しやジェスチャーをメインとする遊びが多く、発話や移動は比較的少なかった。母親の働きかけに対し、子どもは短時間注意を向けるが、子どもが長時間遊んでいたのは自発的に手にとった玩具であった。例えば、母親は何度かボールを転がしてキャッチボールをしようと試みるが、子どもはボールをつかんで叩いて遊んだり、おもちゃ箱に向かい別の新しい玩具を探そうとしたりしていた。母親の働きかけが、子どもの遊びを中断させてしまう場面もあったが、母親が提案した玩具に対して時間をあけて子どもが自発的に手にとる場面もあった。

② 事例 B

母親の発話やジェスチャーが非常に多く見られ、母子の移動も多かった。母親が次々と新しい玩具や遊びを提案し、子どももそれに応じていたが、その後すぐに子どもが名残惜しそうに今まで手にしていた玩具を再度手に取ったり注意を向け直したりする場面も見られた。母親がコップで飲み物を飲むジェスチャーをし、子どもはそれを見つめるが、すぐには応じずに、別の遊びをはさんで、子どもが自発的にコップで飲むジェスチャーをする場面があった。

③ 事例 C

子どもの月齢が比較的小さくハイハイの状態であった。先の2事例と大きく異なるのは、母親が遊びを提案するなどして自分(母親)の方に注意を向けさせようとするのが少なかったことである。むしろ、子どもが注意している対象を母親が共に注意している状態が多かった。すなわち、子どもと向かい合って遊ぶよりは、子どもと横並びになるか子どもの後ろに位置して、玩具などを共に注視していることが多かった。この事例においても、母親の働きかけは短時間、子どもの注意をひきつけるが、子どもは自発的な注意を母親とは別のものに向けていることが多かった。

これらの事例から、健康な母子関係においては、子どものジェスチャーや発話を母親が意図的に方向づけることは難しいことが示唆される。いずれも、母親の働きかけは短時間、子どもの注意をひき、子どもは応答するが、子どもの注意や関心は母親の意図とは独立であることを感じさせる事例であった。「養育者のジェスチャーが子どものジェスチャーや言葉の発達を促す」という予測は本研究のようなミクロな場面では必ずしも当てはまらなかった。むしろ、子どもの自発的な発話やジェスチャーが先行し、それに対して母親が後から適切にフィードバックすることの方が現実的であり、効果があることが示唆される。

(2) 国内外における位置づけとインパクト

研究当初は、わが国における子どものジェスチャーと語彙発達が、海外の研究(Iverson et al., 2008: 引用文献③)と同様の現われ方をするのかについて明らかにすることを目的としていたが、研究方法を変えたため、直接検討することはできなかった。しかし、母子の自然な遊び場面における1歳前後の子どもの注意、行動(ジェスチャーや指差しを含む)、発話が、先行研究から予測される以上に自発的であり、母親の意図とは独立したものであることをうかがわせる知見が得られた。

研究期間中の文献研究において、選好注視法などの実験法による研究をレビューし、発話前の子どもが、従来考えられていた以上に「有能」であることを示した(加地, 2014: 引用文献⑧)。本研究の自然観察法によって得られた実際の事例データからも、子どもが従来考えられていた以上に「有能」(自発性、独立性を有している)ことが示唆された。

(3) 今後の展望

現時点では3事例に対してエピソード分析に基づいた検討・考察を行っているが、今後はより客観性・科学性のある分析方法を検討したい。具体的には、①事例を増やす、②発話や注意、ジェスチャーを数値化するなどの方法が考えられる。

<引用文献>

- ① Rowe, M. L., & Goldin-Meadow, S. Early gesture selectively predicts later language learning. *Developmental Science*, 2009, 12, 182-187.
- ② Rowe, M. L., Özcalışkan, S., & Goldin-Meadow, S. Learning words by hand: Gesture's role in predicting vocabulary development. *First Language*, 2008, 28, 182 - 199.
- ③ Iverson, J. M., Capirci, O., Volterra, V., & Goldin-Meadow, S. Learning to talk in a gesture-rich world: Early communication in Italian vs. American children. *First Language*, 2008, 28, 164 - 181.
- ④ 加地 雄一, 指差しから見た1歳児の社会的認知能力, 東京立正短期大学紀要, 2010年, 38巻, 58-67.
- ⑤ 加地 雄一, 仲 真紀子, 手話の記憶における実演効果, 認知心理学研究, 2008年, 6巻, 21-33.
- ⑥ 加地 雄一, 仲 真紀子, 花田 安弘, 被験者実演課題における年齢効果と系列位置曲線, 日本教育工学会論文誌, 2008年, 32巻 Suppl. 号, 181-184.
- ⑦ 加地 雄一, 仲 真紀子, 実演効果における動作の表現容易性と動作・意味間の連合の影響, 日本教育工学会論文誌, 2010年, 34巻 Suppl. 号, 117-120.

- ⑧ 加地 雄一，発語前の赤ちゃんの心の中：有能性をめぐる問題，カリタス女子短期大学紀要 Caritas，2014 年，48 巻，44-50.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

- ① 加地 雄一，創造性の高め方：すぐに試せる方法の検討，中央大学教育学論集，査読無，57 巻，2015 年，pp.193-198
- ② 加地 雄一，砂遊びの情動安定作用：生理的反応の分析，東京立正短期大学紀要，査読無，42 巻，2014 年，pp.44-48
- ③ 加地 雄一，発語前の赤ちゃんの心の中：有能性をめぐる問題，カリタス女子短期大学紀要 Caritas，査読無，48 巻，2014 年，pp.44-50
- ④ 加地 雄一，関谷 大輝，鎌田 弥生，箱庭の手続きを構造化することの効果について：主観的自己評価と心拍変動による検討，東京成徳大学研究紀要，査読無，21 巻，2014 年，pp.55-63
- ⑤ 加地 雄一，松浦 隆信，鎌田 弥生，構造化箱庭療法の有効性に関する検討：事例分析を通して，東京成徳大学研究紀要，査読無，20 巻，2013 年，pp.123-137
- ⑥ 加地 雄一，未知漢字の記憶における書字動作の効果，日本教育工学会論文誌，査読有，36 巻 Suppl. 号，2012 年，pp.1-4

〔その他〕

ホームページ等

<https://sites.google.com/site/yuichikajilab/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加地 雄一 (KAJI, Yuichi)

東京家政学院大学・現代生活学部・准教授
研究者番号：80575134